

中期目標の達成状況に関する評価結果

帯広畜産大学

平成29年6月

大学改革支援・学位授与機構

目 次

法人の特徴	1
(法人の達成状況報告書から転載)		
評価結果		
《概要》	5
《本文》	9
《判定結果一覧表》	19

法人の特徴

- 1 本学は、昭和 16 年に帯広高等獣医学校として創立し、昭和 24 年に国立学校設置法により国立大学唯一の農学系単科大学として設立された。昭和 42 年に大学院畜産学研究科修士課程を開設し、平成 2 年及び 6 年には、それぞれ岐阜大学大学院連合獣医学研究科博士課程及び岩手大学大学院連合農学研究科博士課程の構成大学として参加、平成 16 年には大学院畜産学研究科（修士課程）に独立専攻の畜産衛生学専攻を設置、平成 18 年には日本で唯一「博士（畜産衛生学）」の学位を授与する大学院畜産学研究科畜産衛生学専攻を設置した。平成 24 年からは国際水準の獣医学教育を実施するため、北海道大学とともに共同獣医学課程を開始した。
- 2 研究体制については、平成 12 年に我が国の農学系大学では唯一の全国共同利用施設「原虫病研究センター」を設置した。同センターは平成 19 年に 3 種類の原虫病（馬ピロプラズマ病、牛バベシア病、スーラ病）に関する国際獣疫事務局（OIE）のリファレンス・ラボラトリーに認定されたほか、平成 20 年には、アジア初の原虫病の世界的研究拠点として「動物原虫病の監視と制圧」に関する OIE コラボレーティングセンターに認定された。平成 21 年には、全国共同利用の制度改革に伴い、共同利用・共同研究拠点として認定された。
- 3 本学が位置する北海道十勝地方は、「日本の食料基地」として食料の生産から消費まで一貫した環境が揃っている地域である。この地域には、本学のほかに（独）農業・食品産業技術総合研究機構北海道農業研究センター芽室拠点、（地独）北海道立総合研究機構十勝農業試験場・畜産試験場等、数多くの試験研究機関が集積しており、国や地域の農業振興政策を支える重要な技術開発基盤地域となっている。本学が担う学術分野の先端基礎研究および開発研究の成果を実践する場として、また、「食を支え、暮らしを守る」高度専門職業人を育成する場として、この最適なフィールドを活用できることは、本学最大の強みである。
- 4 第 2 期中期目標期間においては以下のミッション・ビジョンを掲げて教育研究等の充実に取り組むとともに、獣医学分野と農畜産学分野を融合した教育体制、国際通用力を持つ教育課程及び食の安全確保のための教育システムを保有する我が国唯一の国立農学系単科大学として、グローバル社会の要請に即した農学系人材を育成することを目指し、大学の強み・特色を伸長して社会的役割を一層果たすための機能強化策を推進した。〔個性の伸長に向けた取組（戦略性が高く意欲的な計画）]参照)

【ミッション】

知の創造と実践によって実学の学風を発展させ、「食を支え、暮らしを守る」人材の育成を通じて、地域および国際社会へ貢献する。

【ビジョン】

1. 恵まれた自然環境を活かしつつ、潤いと活気があり、豊かな人間性を醸成できるような「学びあいのコミュニティ」を創出する。
2. 獣医・農畜産融合の視点から、幅広い見識と国際性を有し、実践力のある人材の育成を目指す。
3. 生命・食料・環境の分野に関し、地球規模課題の解決に向けて、トップレベルの学術研究拠点となることを目指す。
4. 創造的、学際的な実学研究成果を社会に還元して、地域および国際社会の持続的発展に貢献する。

[個性の伸長に向けた取組（戦略性が高く意欲的な計画）]

1. 欧米水準の獣医学教育の実施

平成 24 年 4 月から帯広畜産大学畜産学部と北海道大学獣医学部とで共同獣医学課程を開始するとともに、国立大学改革強化推進補助金により、北海道大学、山口大学、鹿児島大学が連携して教育の一層の高度化に取り組み、獣医学教育の国際認証取得に向けた戦略的連携を実施した。（関連する中期計画）計画 1-2-4-1

2. 食と動物の国際教育研究拠点の形成に向けた取組

① 世界トップレベル大学等との国際共同研究の推進

獣医学及び農畜産学分野において世界水準の教育研究活動を展開するため、コーネル大学（米国）及びウィスコンシン大学（米国）と学術交流協定を締結し、平成 27 年 4 月に設置した「グローバルアグロメディシン研究センター」において、両大学との教員交流による国際共同研究等を実施した。（関連する中期計画）計画 1-2-3-3、計画 2-1-1-6、計画 2-2-1-2

② 国際安全衛生基準適応の実習環境による人材育成

平成 26 年 3 月に畜産フィールド科学センターにおいて日本の大学で初めて世界最高水準の食品マネジメントシステム認証（FSSC22000）を取得するとともに、実務家教員を採用して大学院畜産学研究科で実施する「食品安全マネジメント教育プログラム」の構築を進めた。（関連する中期計画）計画 1-1-4-4

③ 企業等社会のニーズに即した共同研究・人材育成

平成 25 年度において地域連携推進センター内にインキュベーションオフィスを新設し、企業 5 社が入居して同企業所属の客員教授及び大学院社会人入学の同企業社員による利用を開始するとともに、実務家教員を採用して地域連携推進センターに配置し、社会で即戦力となる人材を育成する体制を整備した。（関連する中期計画）計画 1-1-4-5

3. 教育研究組織の再編

獣医学分野と農畜産学分野を融合した実学重視の大学院教育を推進するため、平成 30 年 4 月の大学院畜産学研究科の再編（博士課程（獣医学専攻・畜産科学専攻）の設置等）

に向けて大学院改組ワーキンググループを設置し、組織体制等の検討を実施した。(関連する中期計画) 計画 1-1-2-2

[東日本大震災からの復旧・復興へ向けた取り組み等]

東日本大震災の発生以降、学内に「東日本災害復興支援プロジェクト」を組織し、教員を派遣して「放射能汚染除去対策」、「畜産物の放射能汚染調査」、「畜産物に放射能が移行しない飼育方法の教授」、「メタン発酵を用いた原発被災地の環境修復の提案」等の支援を関係機関と連携して実施した。また、同プロジェクトの一環として、原発事故による被害を受けた福島県飯舘村村長等関係者を招き、学生・一般市民を対象とする特別講義やシンポジウムを開催した。学生が参加するボランティア事業としては、学内から募集した学生及び同行教員が被災地を訪問し、学生実習で生産した食材を使った炊き出し、小学生を対象とする出前授業、現地実情調査、放射線量の測定等の復興支援活動を実施した。このほか、被災した学生に対する授業料の免除等の経済的支援、東日本大震災チャリティーコンサートの開催、復興支援を目的とした募金活動を継続して行っている。

評価結果

《概要》

第2期中期目標期間の教育研究の状況について、法人の特徴等を踏まえ評価を行った結果、帯広畜産大学の中期目標（大項目、中項目、小項目）の達成状況の概要は、次のとおりである。

＜判定結果の概要＞

中期目標（大項目）	判定	中期目標（小項目）の判定の分布			
		非常に優れている	良好	おおむね良好	不十分
(Ⅰ) 教育に関する目標	おおむね良好				
① 教育内容及び教育の成果等に関する目標	良好		3	2	
② 教育の実施体制等に関する目標	おおむね良好		2	2	
③ 学生への支援に関する目標	おおむね良好			1	
(Ⅱ) 研究に関する目標	おおむね良好				
① 研究水準及び研究の成果等に関する目標	良好		2		
② 研究実施体制等に関する目標	おおむね良好		2	2	
(Ⅲ) その他の目標	良好				
① 社会との連携や社会貢献に関する目標	良好		1		
② 国際化に関する目標	良好		1		

＜主な特記すべき点＞

「戦略性が高く意欲的な目標・計画」に認定されている取組

- 国際通用性のある獣医学教育の充実を目指して、平成 24 年度から国立獣医系 4 大学群による欧米水準の獣医学教育実施に向けた連携体制を構築し、帯広畜産大学、北海道大学の共同獣医学課程と山口大学及び鹿児島大学の共同獣医学部が連携して一層の高度化に取り組み、それぞれの特性を活かした教育プログラムの開発と相互利用、獣医学教育の国際認証取得に向けた戦略的連携を実施している。平成 25 年度に、各大学の連携を推進するため 4 大学連携獣医学教育改革協議会を設置し、欧米認証に必要な教育体制等に関する調査や e-learning システム等の学習環境を整備している。また、平成 26 年度に、欧州獣医学教育認証機構（EAEVE）の有識者による公式事前診断を実施し、指摘事項を踏まえたカリキュラム改善に着手するなど、欧州獣医学教育認証取得に向けた連携を推進している。（中期計画 1-2-4-1）

- 平成 30 年 4 月の畜産学研究科の再編に向け、大学院改組ワーキンググループを設置し再編の骨子を策定している。教員に対しヒアリングを行い、全学説明会を開催の上、再編構想の概要を取りまとめるなど、教育改革の方向性である獣医学分野と農畜産学分野を融合した大学院教育を推進するための機能強化を図っている。（中期計画 1-1-2-2）
- 畜産フィールド科学センターでは、国際安全衛生基準の取得、維持に対応できる人材を育成するため、平成 25 年度に食品安全マネジメントシステム認証（FSSC22000）を取得している。また、地域連携推進センターでは実務家教員の採用等を行い、平成 27 年度に大学院生を対象とする HACCP システム構築研修を実施し 16 名が受講するなど、国際標準の食品安全マネジメントシステム教育を推進している。（中期計画 1-1-4-4）
- 平成 25 年度に地域連携推進センターにインキュベーションオフィスを新設し、食品関連企業が入居し、客員教授及び大学院社会人学生として同企業社員が利用している。また、実務家教員として特任教授 2 名を採用するとともに、教育研究コーディネーター 1 名を採用するなど、共同研究を通じた進路指導を強化することで、企業のニーズと学生の研究テーマをマッチングさせて社会で即戦力となる人材を育成している。（中期計画 1-1-4-5）
- 世界レベルの研究を強化するため、コーネル大学（米国）、ウィスコンシン大学（米国）から計 10 名の研究者を招へいしている。コーネル大学とは獣医毒性学や水性動物学等の応用獣医学分野で、ウィスコンシン大学とは植物病理学、食品工学等の畑作物分野で国際共同研究に取り組んでいる。（中期計画 2-1-1-6）

- 食と動物に係る世界の諸課題の解決に貢献することを目的とするグローバルアグロメディシン研究センターを平成 27 年度に設置し、コーネル大学及びウィスコンシン大学から計 10 名の研究者を招へいするとともに両大学との国際共同研究・連絡調整等を担当する若手研究者 4 名を新たに採用し、獣医・農畜産融合の国際共同研究体制を整備している。（中期計画 2-2-1-2）

注目すべき取組

- 国際獣疫事務局（OIE）よりコラボレーティングセンターとして認定された原虫病研究センターでは、第 2 期中期目標期間（平成 22 年度から平成 27 年度）に新たにテニユアトラック教員 1 名、外国人研究者 3 名を採用し、技術支援職員を 2 名増員し、研究体制の強化を図るとともに、動物飼育エリアに設置した大型オートクレーブ 2 台を更新するなど研究環境の強化を図っている。また、OIE が編集する国際標準家畜感染症・予防診断マニュアルのチャプター改訂版を作成し、学会、学術シンポジウム等の研究発表を第 2 期中期目標期間に計 163 回開催するなど、国内外の関連学問分野の人材育成に貢献している。（中期計画 2-1-1-5）

<復旧・復興への貢献・支援活動等に関係した顕著な取組>

- 東日本大震災の発生以降、学内に「東日本災害復興支援プロジェクト」を組織し、教員を派遣して「放射能汚染除去対策」、「畜産物の放射能汚染調査」、「畜産物に放射能が移行しない飼育方法の教授」、「メタン発酵を用いた原発被災地の環境修復の提案」等の支援を関係機関と連携して実施した。また、同プロジェクトの一環として、原発事故による被害を受けた福島県飯舘村村長等関係者を招き、学生・一般市民を対象とする特別講義やシンポジウムを開催した。学生が参加するボランティア事業としては、学内から募集した学生及び同行教員が被災地を訪問し、学生実習で生産した食材を使った炊き出し、小学生を対象とする出前授業、現地実情調査、放射線量の測定等の復興支援活動を実施した。このほか、被災した学生に対する授業料の免除等の経済的支援、東日本大震災チャリティーコンサートの開催、復興支援を目的とした募金活動を継続して行っている。

《本文》

(I) 教育に関する目標

1. 評価結果及び判断理由

【評価結果】 中期目標の達成状況がおおむね良好である

(判断理由) 「教育に関する目標」に関する中期目標（3項目）のうち、1項目が「良好」、2項目が「おおむね良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

2. 中期目標の達成状況

(1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標

【評価結果】 中期目標の達成状況が良好である

(判断理由) 「教育内容及び教育の成果等に関する目標」の下に定められている具体的な目標（5項目）のうち、3項目が「良好」、2項目が「おおむね良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。なお、「良好」と判定した3項目のうち1項目は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」に認定された2計画を含み、「おおむね良好」と判定した2項目のうち1項目は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」に認定された1計画を含む。

<特記すべき点>

(優れた点)

○獣医学分野と農畜産学分野を融合した大学院教育の推進

中期目標（小項目）「(アドミッション・ポリシー) 【大学院課程】 国際的視点に基づいて「食の安全確保」に関する諸問題に関心を持ち、高度専門職業人として行動する意欲のある学生を広く国内外から受け入れる。」について、平成30年4月の畜産学研究科の再編に向け、大学院改組ワーキンググループを設置し再編の骨子を策定している。教員に対しヒアリングを行い、全学説明会を開催の上、再編構想の概要を取りまとめるなど、教育改革の方向性である獣医学分野と農畜産学分野を融合した大学院教育を推進するための機能強化を図っている。

(中期計画 1-1-2-2)

○農畜産学の共通教育の充実

中期目標（小項目）「（カリキュラム・ポリシー） 【学士課程】 獣医・農畜産融合の視点から、農場から食卓まで生命・食料・環境を科学し、農畜産の幅広い分野で活躍する実践的な専門職業人を育成する。」について、農場から食卓までの教育ポリシーに沿った人材育成を行うため、平成 25 年度から全学農畜産実習と連動して農畜産科学の基礎を修得する「農畜産科学概論Ⅰ～Ⅵ」を畜産科学課程のすべての教育ユニットで学ぶ必修科目として開設し、農畜産学の共通教育の充実に取り組んでいる。また、平成 26 年度のパン製造の実務で使える熱工実習、平成 27 年度の微生物を用いた農産食品製造実習等、企業と連携した実学実習教育を充実し、社会のニーズを見据えた幅広い視野の教育を実践している。

（中期計画 1-1-3-3）

○獣医・農畜産融合を視野に入れた実践的な高度教育の実施

中期目標（小項目）「【大学院課程】 獣医・農畜産融合の視点から、実践的な教育を行うことに努め、食の安全確保・生産性向上・環境保全に貢献できる、国際的な視野を持つ高度専門職業人を育成する。」について、社会のニーズを適切に把握し、より実践的な高度教育を目指した教育内容とするため、修了生が就職した企業等や帯広畜産大学に関心を持つ企業等に対してアンケート調査を定期的実施している。また、平成 22 年度の修士 3 専攻改組や平成 24 年度の畜産衛生学専攻のコースカリキュラム改編等にアンケート結果を反映させることで、獣医・農畜産融合を視野に入れた教育を実践している。（中期計画 1-1-4-1）

○国際標準の食品マネジメントシステム教育の推進

中期目標（小項目）「【大学院課程】 獣医・農畜産融合の視点から、実践的な教育を行うことに努め、食の安全確保・生産性向上・環境保全に貢献できる、国際的な視野を持つ高度専門職業人を育成する。」について、畜産フィールド科学センターでは、国際安全衛生基準の取得、維持に対応できる人材を育成するため、平成 25 年度に食品安全マネジメントシステム認証（FSSC22000）を取得している。また、地域連携推進センターでは実務家教員の採用等を行い、平成 27 年度に大学院生を対象とする HACCP システム構築研修を実施し 16 名が受講するなど、国際標準の食品安全マネジメントシステム教育を推進している。

（中期計画 1-1-4-4）

○企業のニーズと学生の研究テーマのマッチングによる即戦力人材の育成

中期目標（小項目）「【大学院課程】 獣医・農畜産融合の視点から、実践的な教育を行うことに努め、食の安全確保・生産性向上・環境保全に貢献できる、国際的な視野を持つ高度専門職業人を育成する。」について、平成 25 年度に地域連携推進センターにインキュベーションオフィスを新設し、食品関連企業が入居し、客員教授及び大学院社会人学生として同企業社員が利用している。また、実務家教員として特任教授 2 名を採用するとともに、教育研究コーディネーター 1 名を採用するなど、共同研究を通じた進路指導を強化することで、企業のニーズと学生の研究テーマをマッチングさせて社会で即戦力となる人材を育成している。（中期計画 1-1-4-5）

○畜産学研究科における教育研究施設の機能強化

畜産学研究科において、教育研究施設の機能強化のため、畜産フィールド科学センターにおける食品安全マネジメント認証の取得、HACCP 準拠の食品加工実習施設の新設、動物・食品検査診断センターにおける感染症検査、食品衛生検査の実施、地域連携推進センターにおけるインキュベーションオフィスの設置等に取り組んでいる。（現況分析結果）

（特色ある点）

○アドバンス制における基盤教育の初年次教育の充実

中期目標（小項目）「（カリキュラム・ポリシー） 【学士課程】 獣医・農畜産融合の視点から、農場から食卓まで生命・食料・環境を科学し、農畜産の幅広い分野で活躍する実践的な専門職業人を育成する。」について、入学直後は大学で学ぶための基礎となる幅広い知識や技術、農畜産全般の基礎知識を中心とした学習を行い、専門教育への意欲と方向性を育成するとともに、学年が進むにつれて獣医農畜産の特定分野の深い専門知識・技術の学習へと前進（アドバンス）していく教育課程であるアドバンス制を畜産学部で実施している。アドバンス制における基盤教育の初年次教育を充実するため、平成 22 年度からピアサポートで支える補習教育と初年次教育のプログラムに基づき、初年次教育における理系基礎科目や英語教育の教育体制と教育内容、初年次教育と専門教育の連結を改善するため、学習支援コーディネーター室を設置するとともに、個別指導を希望するすべての初年次生にチューターを配置して基礎学力の向上を図っている。

（中期計画 1-1-3-1）

(2) 教育の実施体制等に関する目標

【評価結果】中期目標の達成状況がおおむね良好である

(判断理由) 「教育の実施体制等に関する目標」の下に定められている具体的な目標(4項目)のうち、2項目が「良好」、2項目が「おおむね良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。なお、「良好」と判定した2項目のうち1項目は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」に認定された1計画を含み、「おおむね良好」と判定した2項目のうち1項目は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」に認定された1計画を含む。

<特記すべき点>

(優れた点)

○アンケート調査に基づく教育方法の見直し・改善

中期目標(小項目)「(教育の質の向上) 獣医・農畜産融合の基本方針の下、教育の質の向上に資するため教育組織・システムを整備する。」について、卒業・修了生及び就職先に毎年度アンケート調査を実施し、その分析結果に基づき、教育方法・内容等について検証し、平成26年度に、外国語科目の単位数の見直しやコンピュータ科目へのグループワークの導入等、教育方法の見直し・改善に取り組んでいる。(中期計画1-2-3-2)

○国際通用性のある獣医学教育の充実を目指した他大学との連携体制の構築

中期目標(小項目)「(教育組織) 他大学等との連携を図り、教育課程の多様化と高度化を進めるため、組織整備を行う。」について、国際通用性のある獣医学教育の充実を目指して、平成24年度から国立獣医系4大学群による欧米水準の獣医学教育実施に向けた連携体制を構築し、帯広畜産大学、北海道大学の共同獣医学課程と山口大学及び鹿児島大学の共同獣医学部が連携して一層の高度化に取り組み、それぞれの特性を活かした教育プログラムの開発と相互利用、獣医学教育の国際認証取得に向けた戦略的連携を実施している。平成25年度に、各大学の連携を推進するため4大学連携獣医学教育改革協議会を設置し、欧米認証に必要な教育体制等に関する調査やe-learningシステム等の学習環境を整備している。また、平成26年度に、欧州獣医学教育認証機構(EAEVE)の有識者による公式事前診断を実施し、指摘事項を踏まえたカリキュラム改善に着手するなど、欧州獣医学教育認証取得に向けた連携を推進している。(中期計画1-2-4-1)

(特色ある点)

○海外教育プログラムの導入の推進

中期目標（小項目）「（教育の質の向上） 獣医・農畜産融合の基本方針の下、教育の質の向上に資するため教育組織・システムを整備する。」について、平成 27 年度にコーネル大学（米国）及びウィスコンシン大学（米国）の研究者 10 名を招へいして第 1 回特別講義気候変動へ向けての取り組み（生理学的・遺伝学的手法の融合）等各専門分野の特別講義を実施している。また、コーネル大学等が実施する海外悪性伝染病プログラムに教員を派遣し、プログラムで使用された講義資料を活用するために無償使用の許諾を得て翻訳するなど、海外教育プログラム導入に向けての準備を進めている。（中期計画 1-2-3-3）

(3) 学生への支援に関する目標

【評価結果】 中期目標の達成状況がおおむね良好である

（判断理由）「学生への支援に関する目標」の下に定められている具体的な目標（1 項目）が「おおむね良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

<特記すべき点>**(特色ある点)**

○学生が主体となった地域貢献の推進

中期目標（小項目）「（学生支援の充実） 総合的な学生支援を充実させて、学生の主体的学びを支援する。」について、学生が主体となって活躍できる地域貢献を推進するため、平成 22 年度におびひろ動物園と連携協定を締結し、動物園内に大学のサテライトブースを設置し、学生ボランティアサークルが動物園ガイドやブース展示標本説明を行うとともに、動物の生態をクイズやイラストで紹介する看板を設置するなど、学生が企画した動物園環境充実事業を継続的に実施している。また、平成 23 年度には帯広市文化スポーツ振興財団と連携協定を締結し、学生サークルがスポーツ体験、動物とのふれあい体験等の地域との交流を図るイベントを毎年度複数企画して実施している。平成 27 年度から帯広市との連携事業である若者が牽引するしごとづくり・まちづくりプランを実施し、中心地市街地における学生生活活動の展開による地域活性化支援事業等を行うなど、新たな地域貢献事業を実施している。（中期計画 1-3-1-2）

(Ⅱ) 研究に関する目標

1. 評価結果及び判断理由

【評価結果】 中期目標の達成状況がおおむね良好である

(判断理由) 「研究に関する目標」に関する中期目標(2項目)のうち、1項目が「良好」、1項目が「おおむね良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

2. 中期目標の達成状況

(1) 研究水準及び研究の成果等に関する目標

【評価結果】 中期目標の達成状況が良好である

(判断理由) 「研究水準及び研究の成果等に関する目標」の下に定められている具体的な目標(2項目)のすべてが「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。なお、「良好」と判定した2項目のうち1項目は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」に認定された1計画を含む。

<特記すべき点>

(優れた点)

○獣医・農畜産融合による世界的水準の学術研究の推進

中期目標(小項目)「(世界的水準の研究推進) ①生命・食料・環境に関するフィールド科学的研究を中心とした世界的水準の学術研究を推進する。」について、平成20年度から平成24年度まで実施したグローバルCOEアニマル・グローバル・ヘルスプログラムでは、獣医・農畜産融合の教育研究により、食の安全確保に向けた高度専門職業人の育成を目指した活動を進め、世界38拠点のフィールドを開拓し、延べ245回の海外教育研究活動を行うとともに、国際的な学術雑誌等に649件論文を掲載している。(中期計画2-1-1-1)

○原虫病研究センターにおける研究体制及び研究環境の強化

中期目標(小項目)「(世界的水準の研究推進) ①生命・食料・環境に関するフィールド科学的研究を中心とした世界的水準の学術研究を推進する。」について、国際獣疫事務局(OIE)よりコラボレーティングセンターとして認定された原虫病研究センターでは、第2期中期目標期間(平成22年度から平成27年度)に新たにテニユアトラック教員1名、外国人研究者3名を採用し、技術支援職員を2名増員し、研究体制の強化を図るとともに、動物飼育エリアに設置した大型オートクレーブ2台を更新するなど研究環境の強化を図っている。また、

OIE が編集する国際標準家畜感染症・予防診断マニュアルのチャプター改訂版を作成し、学会、学術シンポジウム等の研究発表を第2期中期目標期間に計163回開催するなど、国内外の関連学問分野の人材育成に貢献している。

(中期計画 2-1-1-5)

○海外大学の研究者招へいによる世界レベルの研究の強化

中期目標 (小項目) 「(世界的水準の研究推進) ①生命・食料・環境に関するフィールド科学的研究を中心とした世界的水準の学術研究を推進する。」について、世界レベルの研究を強化するため、コーネル大学、ウィスコンシン大学から計10名の研究者を招へいしている。コーネル大学とは獣医毒性学や水性動物学等の応用獣医学分野で、ウィスコンシン大学とは植物病理学、食品工学等の畑作物分野で国際共同研究に取り組んでいる。(中期計画 2-1-1-6)

○畜産学研究科における学生の研究成果

畜産学研究科において、文部科学省グローバル COE プログラム「アニマル・グローバル・ヘルス」により、平成25年度に、畜産衛生学専攻博士後期課程の3名が日本学術振興会特別研究員に採用されているほか、平成24年度に獣医寄生虫学会奨励賞等の学会賞、平成26年度に日本学術振興会育志賞を受賞している。

(現況分析結果)

○原虫病研究センターにおける研究推進

原虫病研究センターにおいて、『研究論文の日本の大学ベンチマーキング2015』の中の「サブジェクトカテゴリから見る日本の大学の状況」では、寄生物学分野において、論文数は国内1位、世界48位、被引用数は国内5位、世界158位となっている。(現況分析結果)

(特色ある点)

○地域への研究成果の還元

中期目標 (小項目) 「(研究成果の社会への還元) ②生命・食料・環境の分野において、優れた研究成果を挙げ、それを社会に還元する。」について、動物・食品検査診断センターは、公衆衛生分野の研究を推進し、十勝農業協同組合連合会等と連携して十勝における BVD (牛ウイルス性下痢症) の清浄化に取り組んでいる。動物医療センターは、難診断病畜の病態解明・診断開発等の研究を推進し、地域の診療機関と連携して家畜の生産性技術の向上に取り組んでいる。また、畜産フィールド科学センターは、家畜防疫に関する研究を推進し、家畜保健衛生所と連携して家畜防疫の重要性等を地域に普及するなど地域関係機関と連携して、技術普及等に取り組んでいる。(中期計画 2-1-2-2)

(2) 研究実施体制等に関する目標

【評価結果】 中期目標の達成状況がおおむね良好である

(判断理由) 「研究実施体制等に関する目標」の下に定められている具体的な目標(4項目)のうち、2項目が「良好」、2項目が「おおむね良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。なお、「良好」と判定した2項目のうち1項目は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」に認定された1計画を含む。

<特記すべき点>

(優れた点)

○獣医・農畜産融合の国際共同研究体制の整備

中期目標(小項目)「(研究者の配置) 社会のニーズに対応した研究を行うため、研究組織の柔軟な編成を行い、研究者を適切に配置する。」について、食と動物に係る世界の諸課題の解決に貢献することを目的とするグローバルアグロメディシン研究センターを平成27年度に設置し、コーネル大学及びウィスコンシン大学から計10名の研究者を招へいするとともに両大学との国際共同研究・連絡調整等を担当する若手研究者4名を新たに採用し、獣医・農畜産融合の国際共同研究体制を整備している。(中期計画2-2-1-2)

○若手研究者の積極的採用の推進

中期目標(小項目)「(若手研究者の育成) 研究の活性化と研究者の世代交代を円滑に進めるため、若手研究者の採用、育成を計画的に進める。」について、教員の人事基本計画を策定し、若手研究者を優先して採用する取組に加えて、グローバルCOEプログラムで雇用した任期付助教の常勤教員としての採用や、科学技術人材育成費補助事業であるテニユアトラック普及・定着事業の平成24年度の採択等により若手研究者の積極的採用を進めた結果、平成22年度に20.6%であった40歳未満の若手研究者の比率は、約6ポイント向上している。

(中期計画2-2-2-1)

(Ⅲ) その他の目標

1. 評価結果及び判断理由

【評価結果】中期目標の達成状況が良好である

(判断理由) 「その他の目標」に関する中期目標(2項目)のすべてが「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

2. 中期目標の達成状況

(1) 社会との連携や社会貢献に関する目標

【評価結果】中期目標の達成状況が良好である

(判断理由) 「社会との連携や社会貢献に関する目標」の下に定められている具体的な目標(1項目)が「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

<特記すべき点>

(優れた点)

○地域と連携した各種事業の推進

中期目標(小項目)「(社会への貢献) 社会への貢献や産業界との連携・協力を深めるための体制をさらに充実し、各種の事業を推進する。」について、平成24年度から帯広市と連携し、チャレンジ精神を持って、企業経営、異業種参入、起業化及び地域の経済発展に寄与するリーダーシップを発揮する人材の育成を目的とするフードバレーとから人材育成事業を実施しており、食品有害微生物講習等のプログラムを実施している。また畜産フィールド科学センターでは、獣医師及び人工授精師のリカレント教育として生産獣医療技術研修、人工授精師技術研修を実施しており、平成27年度に生産獣医療技術研修に31名、人工授精師技術研修に8名が参加している。(中期計画3-1-1-2)

(2) 国際化に関する目標

【評価結果】中期目標の達成状況が良好である

(判断理由) 「国際化に関する目標」の下に定められている具体的な目標(1項目)が「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

<特記すべき点>

(優れた点)

- 学生の海外協力隊員活動を単位認定する科目の新設

中期目標(小項目)「(国際戦略) 「獣医・農畜産学分野での開発途上国支援」と「国際的に活躍できる人材の育成」を国際戦略の中核として、国際化を推進する。」について、国際協力機構(JICA)と連携して在学生・卒業生を JICA 青年海外協力隊員として開発途上国に派遣する帯広-JICA 協力隊連携事業を平成 23 年度から実施するとともに、在学生の隊員活動を評価して単位認定する教育科目「海外フィールドワーク」を新設し、平成 27 年度までに長期隊員(2年) 8 名、短期隊員(2か月) 24 名を派遣している。(中期計画 3-2-1-2)

(特色ある点)

- 国際ネットワークの構築及び情報発信

中期目標(小項目)「(国際戦略) 「獣医・農畜産学分野での開発途上国支援」と「国際的に活躍できる人材の育成」を国際戦略の中核として、国際化を推進する。」について、アジア・アフリカ・南米を網羅する海外研究者、帰国留学生・研修生等を結ぶ国際ネットワークを構築し、帰国留学生等約 400 名に大学の最近の活動等を記載したメールマガジンを定期的に配信している。

(中期計画 3-2-1-3)

《判定結果一覧表》

中期目標（大項目）		判定	特記すべき点
中期目標（中項目）			
中期目標（小項目）			
計画番号	中期計画		
(I) 教育に関する目標		おおむね良好	
① 教育内容及び教育の成果等に関する目標		良好	
(アドミッション・ポリシー) 【学士課程】 生命・食料・環境の分野に関心を持ち、実践的な専門職業人として社会に貢献することを目指す学生を求める。		良好	
1-1-1-1	(アドミッション・ポリシー) 【学士課程】 アドミッション・ポリシーで求める学生を受け入れるために、入試機能の見直しを実施するとともに選抜方法等の改善を行う。	良好	
(アドミッション・ポリシー) 【大学院課程】 国際的視点に基づいて「食の安全確保」に関する諸問題に関心を持ち、高度専門職業人として行動する意欲のある学生を広く国内外から受け入れる。		おおむね良好	
1-1-2-1	【大学院課程】 平成22年度に修士3専攻を改組し、専攻ごとのアドミッションポリシーを設定し、新たな入学者選抜方法を導入する。また、海外から広く学生を受け入れるために秋季入学制度を導入する。	おおむね良好	
○ 1-1-2-2	獣医学と農畜産学を融合した実学重視の大学院として、国際通用力を持つ教育機能を強化するため、第3期中期目標期間央までの大学院畜産学研究科の再編成に向けた制度設計を行う。	良好	優れた点
(カリキュラム・ポリシー) 【学士課程】 獣医・農畜産融合の視点から、農場から食卓まで生命・食料・環境を科学し、農畜産の幅広い分野で活躍する実践的な専門職業人を育成する。		良好	
1-1-3-1	(カリキュラム・ポリシー) 【学士課程】 アドバンス制に基づいた教育課程を充実させ、多様な入学者に対応した初年次教育を実施する。	良好	特色ある点
1-1-3-2	シラバスを見直すとともに、GPA等の厳格な成績評価を行う体制を構築する。	良好	
1-1-3-3	獣医・農畜産融合の視点に基づいて、幅広い分野での知識を体系的に修得させる教育方法の改善を行う。	良好	優れた点
【大学院課程】 獣医・農畜産融合の視点から、実践的な教育を行うことに努め、食の安全確保・生産性向上・環境保全に貢献できる、国際的な視野を持つ高度専門職業人を育成する。		良好	
1-1-4-1	【大学院課程】 高度な実践的教育を展開するために、社会のニーズの把握に努め、教育課程に反映させる。	良好	優れた点

(注)計画番号の前に○印がある中期計画は、戦略性が高く意欲的な目標・計画を示す。

中期目標（大項目）		判定	特記すべき点
中期目標（中項目）			
中期目標（小項目）			
計画番号	中期計画		
	1-1-4-2 他大学等との連携を図り、社会人のための実践的大学院教育を促進する。	良好	
	1-1-4-3 国際的視野を涵養するために、英語による教育科目を拡充する。	おおむね良好	
○	1-1-4-4 教育研究施設における国際安全基準認証の取得、実務家教員の雇用等を推進し、国際標準の食品安全マネジメントシステムに関する教育を実施する。	良好	優れた点
○	1-1-4-5 食品関連企業等との連携を充実するとともに、新たに雇用する実務家教員によるオーダーメイド型実務教育に取り組むことにより、産業界等社会で即戦力となる人材育成を推進する。	良好	優れた点
(ディプロマ・ポリシー) 生命・食料・環境に関する幅広い見識と課題解決能力を有した人材を輩出する。		おおむね良好	
1-1-5-1	(ディプロマ・ポリシー) 厳格な成績評価に基づいて、学位授与を行う。	おおむね良好	
② 教育の実施体制等に関する目標		おおむね良好	
(教職員の配置) 大学のカリキュラムポリシーに基づいて、教職員を配置する。		良好	
1-2-1-1	(教職員の配置) 獣医・農畜産融合教育の充実をさらに図るために、重点的に教員の配置を行う。	良好	
1-2-1-2	教職員を柔軟に受け入れ、他の大学等との人事交流を促進する。	良好	
(教育環境の整備) 幅広い実践的な教育をより推進するために、教育設備の充実と効率的な利用を図る。		おおむね良好	
1-2-2-1	(教育環境の整備) 教育設備を総合的に管理運営する体制を構築し、教育環境を充実させる。	おおむね良好	
(教育の質の向上) 獣医・農畜産融合の基本方針の下、教育の質の向上に資するため教育組織・システムを整備する。		良好	
1-2-3-1	(教育の質の向上) FD/SD活動を充実させて、教育の質の向上に取り組む。	おおむね良好	
	1-2-3-2 教育の成果を検証するため、卒業・修了生及び就職先へのアンケート調査を実施し、その分析結果を教育組織の検証に役立て、必要に応じて整備する。	良好	優れた点
○	1-2-3-3 コーネル大学、ウィスコンシン大学との学術交流協定に基づき、平成27年度から招へい外国人研究者による講義、海外教育プログラムの導入等を推進する。	良好	特色ある点

中期目標（大項目）		判定	特記すべき点
中期目標（中項目）			
中期目標（小項目）			
計画番号	中期計画		
	(教育組織) 他大学等との連携を図り、教育課程の多様化と高度化を進めるため、組織整備を行う。	おおむね良好	
○	1-2-4-1 (教育組織) 獣医学教育を充実させるため、北海道大学との共同教育課程を実施するとともに、山口大学、鹿児島大学との連携教育体制を構築し、欧米水準の獣医学教育実現に向けた取組を行う。	良好	優れた点
	1-2-4-2 北海道地区の国立大学と連携し、教養教育を充実させる。	おおむね良好	
	1-2-4-3 北海道地区の国立大学と連携し、入学前の留学生を対象とした準備教育に取り組む。	おおむね良好	
③ 学生への支援に関する目標		おおむね良好	
	(学生支援の充実) 総合的な学生支援を充実させて、学生の主体的学びを支援する。	おおむね良好	
	1-3-1-1 (学生支援の充実) 学生支援の基本方針に基づき、学生支援体制（授業相談、課外活動、学生相談、健康相談、就職支援など）を構築し、運営する。	おおむね良好	
	1-3-1-2 社会と連携し、学生の立場に立った学生支援を充実させる。	良好	特色ある点
(Ⅱ) 研究に関する目標		おおむね良好	
① 研究水準及び研究の成果等に関する目標		良好	
	(世界的水準の研究推進) ①生命・食料・環境に関するフィールド科学研究を中心とした世界的水準の学術研究を推進する。	良好	
	2-1-1-1 (世界的水準の研究推進) 食の安全確保に向けてグローバルCOEプログラム「アニマル・グローバル・ヘルス」を中心とした新しい研究領域を創成する。	良好	優れた点
	2-1-1-2 食の安全確保を目的とする公衆衛生に配慮した食品安全科学的研究を推進する。	おおむね良好	
	2-1-1-3 家畜生産、動物管理、動物生態に関する生命科学研究を推進する。	良好	
	2-1-1-4 畑作・畜産に関する生産性向上、環境保全技術の開発、生物系資源の有効利用に関する研究を推進する。	良好	
	2-1-1-5 原虫病研究センターを共同利用・共同研究拠点として充実させ、原虫病研究をさらに推進し、国際共同研究の中核機能を強化する。	非常に優れている	優れた点
○	2-1-1-6 獣医・農畜産分野における世界レベルの研究を強化し、その成果を教育に還元するため、世界トップクラスのコーネル大学、ウィスコンシン大学等海外大学から外国人研究者を招へいして国際共同研究を推進する。	良好	優れた点

中期目標（大項目）		判定	特記すべき点
中期目標（中項目）			
中期目標（小項目）			
計画番号	中期計画		
（研究成果の社会への還元） ②生命・食料・環境の分野において、優れた研究成果を挙げ、それを社会に還元する。		良好	
2-1-2-1	国際フィールド活動を通じた基礎・応用研究を推進し、国際社会に貢献する。	良好	
2-1-2-2	学内共同教育研究施設等を整備し、地域に根ざした実学研究の推進と技術開発・技術移転の中核としての役割を果たす。	良好	特色ある点
② 研究実施体制等に関する目標		おおむね良好	
（研究者の配置） 社会のニーズに対応した研究を行うため、研究組織の柔軟な編成を行い、研究者を適切に配置する。		良好	
2-2-1-1	（研究者の配置） 研究部門及び学内共同教育研究施設等の組織の見直しを行い、食の安全を多面的に研究する体制を整備する。	良好	
○ 2-2-1-2	世界の食、農畜産、公衆衛生の課題解決に貢献するため、平成27年度にグローバルアグロメディシン研究センターを設置し、コーネル大学、ウィスコンシン大学等からの外国人教員の雇用を推進するとともに、獣医・農畜産融合の国際共同研究担当教員を配属する。	良好	優れた点
（若手研究者の育成） 研究の活性化と研究者の世代交代を円滑に進めるため、若手研究者の採用、育成を計画的に進める。		おおむね良好	
2-2-2-1	（若手研究者の育成） 教員採用計画を策定し、計画的に若手研究者を採用する。	良好	優れた点
2-2-2-2	若手研究者に対し一定の学内プロジェクト研究費を確保し、利用しやすい研究活動環境を提供する。	おおむね良好	
（研究の質の向上システム） 研究の質の向上を図るため、研究戦略に基づいた資源配分を行う。		良好	
2-2-3-1	（研究の質の向上システム） 研究活動に関する評価を実施して、研究費配分や研究組織の編成を行う。	良好	
（研究環境の整備） 国際的な研究拠点構築を推進するために、研究環境の充実と効率的な利用を図る。		おおむね良好	
2-2-4-1	（研究環境の整備） 研究基盤の国際ネットワークを構築する。	おおむね良好	
2-2-4-2	研究施設・設備および学術情報基盤を整備する。	おおむね良好	

中期目標（大項目）		判定	特記すべき点
中期目標（中項目）			
中期目標（小項目）			
計画番号	中期計画		
(Ⅲ) その他の目標		良好	
① 社会との連携や社会貢献に関する目標		良好	
(社会への貢献) 社会への貢献や産業界との連携・協力を深めるための体制をさらに充実し、各種の事業を推進する。		良好	
3-1-1-1	(社会への貢献) 「地域共同研究センター」を「地域連携推進センター（仮称）」として再編し、産学民官に幅広く対応できるような連携体制を整備する。	良好	
3-1-1-2	地域社会からの要望に対して、多様な事業を実施する。	良好	優れた点
② 国際化に関する目標		良好	
(国際戦略) 「獣医・農畜産学分野での開発途上国支援」と「国際的に活躍できる人材の育成」を国際戦略の中核として、国際化を推進する。		良好	
3-2-1-1	(国際戦略) 開発途上国に対する技術協力事業を一層充実するとともに、政府の「留学生30万人計画」で提言される各種方策に取り組む。	良好	
3-2-1-2	国際協力・国際貢献に関する教育プログラムを一層充実するとともに、学生の語学能力の向上を図るための支援を行う。	良好	優れた点
3-2-1-3	世界各国の教育研究機関、行政機関との人的・組織的ネットワークの充実等、国際化を推進するための基盤を強化する。	おおむね良好	特色ある点

「戦略性が高く意欲的な目標・計画」の取組状況について

(1)	<p>北海道大学、山口大学、鹿児島大学との連携により国際的通用性を備えた獣医師養成のための獣医学教育の充実を図ることを目指した計画を進めている。平成24年度から国立獣医系4大学群による欧米水準の獣医学教育実施に向けた連携体制を構築し、帯広畜産大学、北海道大学の共同獣医学課程と山口大学及び鹿児島大学の共同獣医学部が連携して一層の高度化に取り組み、それぞれの特性を活かした教育プログラムの開発と相互利用、獣医学教育の国際認証取得に向けた戦略的連携を実施している。平成25年度に、各大学の連携を推進するため4大学連携獣医学教育改革協議会を設置し、欧米認証に必要な教育体制等に関する調査やe-learningシステム等の学習環境を整備している。また、平成26年度に、欧州獣医学教育認証機構(EAEVE)の有識者による公式事前診断を実施し、指摘事項を踏まえたカリキュラム改善に着手するなど、欧州獣医学教育認証取得に向けた連携を推進している。</p>
(2)	<p>平成27年度にグローバルアグロメディシン研究センターを設置し、コーネル大学(米国)等から研究者を招へいして国際共同研究を推進するなどの取組を通じて、獣医・農畜産分野において、国際通用性を備えつつ即戦力となる人材を育成するとともに、国際共同研究に取り組む計画を進めている。また、コーネル大学及びウィスコンシン大学(米国)から計10名の研究者を招へいするとともに両大学との国際共同研究・連絡調整等を担当する若手研究者4名を新たに採用し、獣医・農畜産融合の国際共同研究体制を整備している。</p>